

夕霧（春夜障子梅）

冬編笠のあかばりで

紙衣の火打膝の皿

風吹きしのぐ忍草

しのぶとすれど古への

花は

嵐のおとがひに

今日の寒さを喰いしはる

はみ出し罌も神さびて

こじり詰まりし

師走の日

胡散らしくも古田屋の

内をのぞいて

「喜左衛門宿にか

喜左々々

と鼻に扇の横柄なり

喜左衛門は立出でて

「おめづらしや伊左衛門様

いざお通り

と袖をひけば

「ア、これ、喜左

さりとは紙衣ざはりが荒い

引けば破るゝ

摺めば跡にしはす浪人

昔は槍が迎いに出る

今は

よう、長刀の草履を脱いで編笠の

中の座敷に通りける

奥の様子を伊左衛門

腹立まざれ床の間の

三味線引きよせ調子さへ

合はば

何うしてかうしてと

胸は

二上り三下り

唄のしょうがに合の手や

可愛い男に逢坂の

関よりつらい世のならい

ア、誠にそれよ

あの唄で思ひ出す

去年の月見に太夫と己が運びきに

弾いた時の面白さ

弾く其ぬしは変はらねど

変つたはおれが身の上

あいつが心底あのやうにあらうとは

思はぬ人に堰き留められて

今は野澤の二つ水

「ア、さうぢやナア

恋も誠も世に在る時

人の心は飛鳥川

変はるは勤めのならいぢやもの

逢はずといつそ去んで呉れうか

イヤ

逢はずにいんでは此胸が

済まぬ

心の中にも暫し

澄むはゆかりの

月の影

無慙やな夕霧は

流れの昔なつかしき

夫の音締め身にこたへ

飛び立つ心奥の間の

首尾が朽ちせぬえんと縁

胸と心の間の山

間の襖の工合よく

明暮恋しい

夫の顔

見るに嬉しく走り寄り

抱きついたるきりす泣くより外の事ぞなき

「コリヤモウ其涙に懲りたもの

エ、ここな萬歳傾城め

萬歳ならば春おぢや

通りや

といひければ

「ウ 此夕霧を萬歳とはえ」

「才萬歳傾城の因縁知らずか

アノ侍の足にかけて蹴らるゝを

歳傾城と云ふぞや

誠にめでとうさむらいける

「しかも足駄はいて蹴るやら」

年立ち返るあしだにて

誠にめでたうさむらいける

「ナント聞こえたか

去りながら何も身すぎぢや

あの様なよい衆に蹴られては損ないかぬ

慾を知らねば身が立たぬ

慾わかには御萬歳とや

年立ち返るあしだにて

誠にめでたうさむらいける

「町人も蹴る

伊左衛門も蹴る

ヤ、ける

と蹴ちらかし

煙草引きよせ吹く煙管の

さらぬ体にて居たりける

夕霧涙もるともに

怨みられたり嘆つのは

色のならいと

いいながら

仲直りすりや明の鐘

憎うてならぬ鳥の声

何の鳥が意地悪で

啼くぢやなければどきぬぎぬの

去なせとむない心から

去年の暮から丸一年

二年越しに音づれなく

それは幾瀬の物案じ

夫故に此病い瘦せ

衰えたが目に見えぬか

ア、ア、

前薬と煉薬と鍼と按摩でようつと

命繋いでたまさかに

逢うてこなはんに甘ようつと

思うところを逆さまな

こりや むごらしい何うぞいの

心強や胸慾な

憎やと膝に引き寄せて

さすりつ泣いつ声を上げ

訳も性根もなかりける

所へ喜左衛門ナ立ち出で

「申々伊左衛門様

おまへ様の御勘当もゆりまする

里の御子息様もおも家へお引き取り

夕霧様の身受もサラリと埒あきました

サア目出度いは

と家内が勇む勢ひに

連れて浮き立つ伊左衛門

悦びの眉を開くや扇屋夕霧

名を萬代の春の花

見る人

袖をぞつらねける。